

「うさぎとかめ」から語り伝えたいこと

矢口 裕 康

1 「うさぎとかめ」に対する私の視点

二千三年後期「保育内容の研究 言葉」(保育科一年)の授業では、「兎と亀」も素材としてとりあげてみた。すると、授業の過程である学生が、

『うさぎとかめ』には、才能をないがしろにするなら努力の方が勝る、ということ伝えたい目的と、先生が子どもを一刀両断にわけるのでなく、様々な子どもが存在すると理解し、柔軟な頭を持つことが大切だということがわかった」

と授業記録に記してきてくれた。授業記録中には、三つの要素が記されている。その一つは90分の授業内容を、白板そして自分で聴き取ったことが記されている。また、授業をうけての私からの課題を受けての見解、そして前述したような感想でもある。この感想は、前の授業内容へもつうじるので、何点か読みあげ導入にも活用させてもらっている。

私は「兎と亀」に対して、かつて自著『語り^話を現代に―ことばではぐくむ子どもの世界―』(「1章 子ども存在とは」)の中で次のような視点を提示した。「さて『うさぎとかめ』の話を聴いている子どもの中にもうさぎタイプそしてかめタイプ、そしてもう一つ忘れてならないのは、この二匹を見守る動物たちの存在のようなタイプ

もあることも見逃してはならない。イソップは、生まれつきの才能(うさぎ)、努力(かめ)という形でまとめたが、この二匹の競争から、子どもは自分の姿を発見し、かつ子どもの姿をとらせることができる。その際、『カメとウサギ』の話には、イソップの文面からは見えていないが、この話の展開の中には、たくさんの二匹の競争を見守る動物や草花たちの存在も忘れてはならない。競争を見守る生物の中にも、かめを応援する者、うさぎを応援する者、そして静観している者とさまざまであろう。そこにこそ、子どもを個として観る眼を提示しているように思う。かめはかめタイプ、うさぎはうさぎタイプと一刀両断にわりきるのではなく、かめにもうさぎ的部分が、うさぎにもかめ的部分が存在しているという眼をもつ必要がある。そして、二匹を見守り応援する動物たちも、うさぎを応援しながらかめにも気持ち動いたり、かめを応援しながらうさぎに気持ち動いたりということもあるはずである。ということからみてゆくと、子どもも日々変身しつづける人間としての認識をもたなくてはならないということを、暗示しているのである」との視点である。私は子どもは「個ども」であると思っている。子どもには、「個」個人差・個性があり、この二つの個を成長させてゆく過程こそが子ども時代であると思う。この「個」を考える素材として「兎と亀」は恰好な話である。

2 タイトルをとらえなおす

人間の顔に相当する存在として、本にはタイトルがある。イソップ寓話の一つ「うさぎとかめ」は、「カメとうさぎ」でもなく「兎と亀」でもなく、やはりひら仮名表字での兎が前にき亀を後に配す「うさぎとかめ」なのである。しかし、塚崎幹夫・訳・中公文庫本では「カメとウサギ」そして中務哲郎・訳・岩波文庫本でも「亀と兎」なのである。兎が頭にくるか、亀が頭にくるか、タイトルの印象が違ってくるのはもちろんであるが、話の印象へも波及しているように思う。

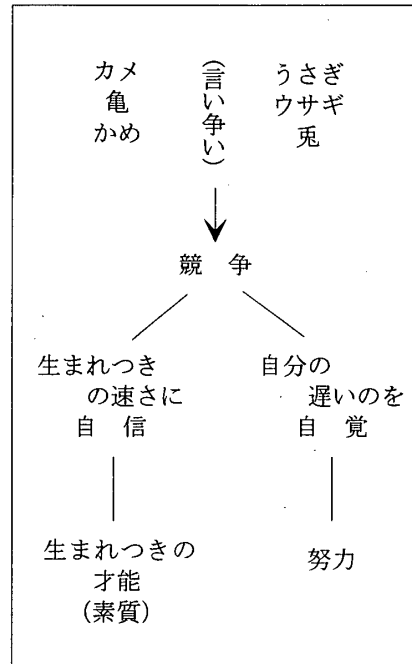
さて、塚崎氏は「カメとウサギ」を、次のように訳している。

「カメとウサギがどちらが速いかでいい争った。その結果、実際に競争することになり、日と場所を約束して別れた。さて、その日、ウサギは生まれつきの速さに自信を持っていたので、出発することを急がなかった。彼は道端で寝そべっているうちに眠ってしまった。しかし、自分の遅いのを自覚していたカメは走るのをやめず、眠っているウサギをこうして引き離し、目的地に着いて勝利を得た。生まれつきの才能があっても、それをないがしろにするなら、努力の方が勝つ、ということもこの話は教えている」

(参考、中務哲郎訳「亀と兎」)

亀と兎が足の速さのことで言い争い、勝負の日時と場所を決めて別れた。さて、兎は生まれつき足が速いので、真剣に走らず、道から逸れて眠りこんだが、亀は自分の遅いのを知っているので、弛まず走り続け、兎が横になっている所も通り過ぎて、勝利のゴールに到達した。素質も磨かなければ努力に負けることが多い、ということとをこの話は説き明かしている。

「兎と亀」の話は



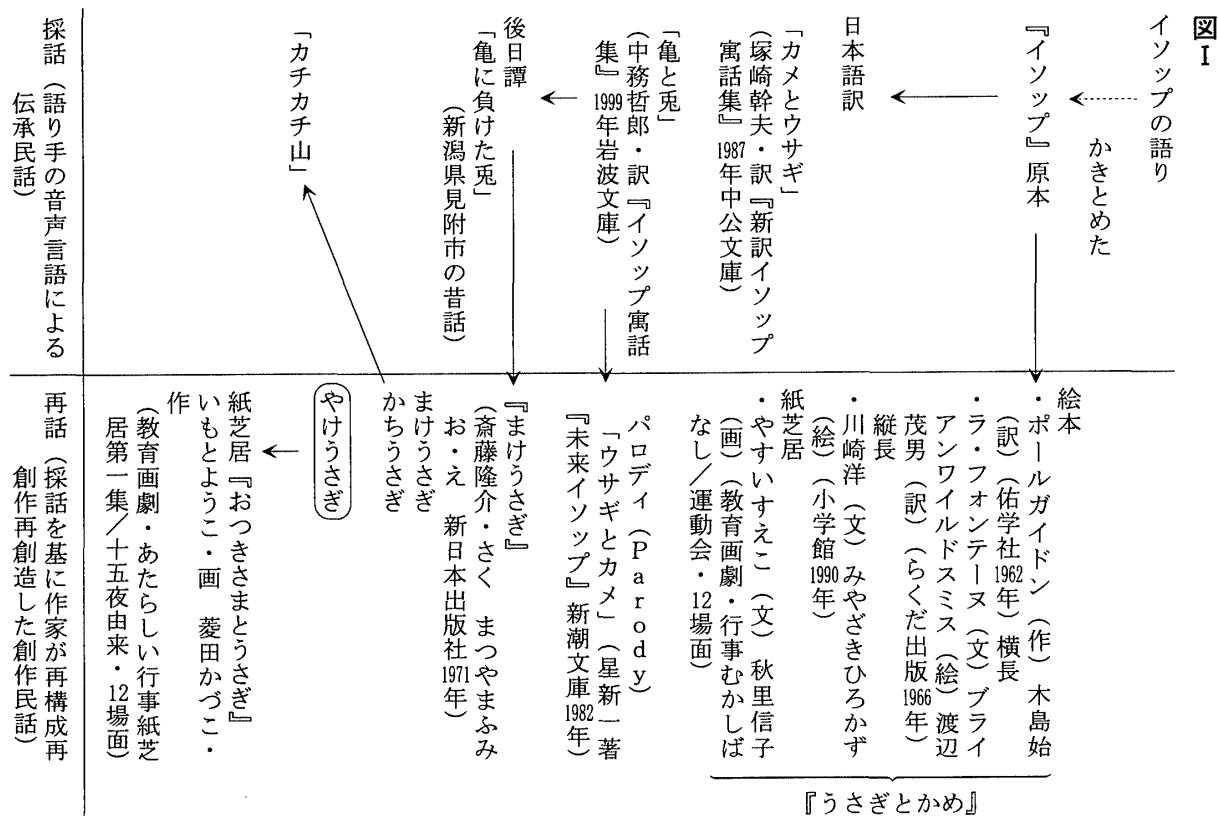
との構図をもっている。「兎と亀」という素材を、自分なりにどうとらえるかが先ずあって、子どもへであろう。

3 採話と再話そして学生の反応

「兎と亀」の採話・再話として、私の手元にある素材は、図Iである。

二千三年後期の授業でも、これらさまざまな作品を駆使しながら、学生と共に考えていった。すると、次のような感想や疑問が提示されていった。

④ 私は「うさぎとかめ」だと思う。いろんな考え方・表し方があると思うけど、私はこの表字が一番心にしみるのではないかとと思う。子どもの中には、「うさぎタイプ」「カメタイプ」がいると書いてあるけど、本当にそうだなあと考えた。足の速い子もいれば、走るのがスキじゃない子もいる。絵を書くのが上手な子もい



るし、下手な子もいる。だけど私は上手、下手、速い、遅いとかの問題じゃなくて、やっぱり、どれだけ努力したかだと思う。結果より過程を大切にできる子どもは(大人も)ステキだと思う。しかし、「うさぎタイプ」「カメタイプ」と2つのタイプがあるからこそ、世の中は成り立っているのかなあと思った。カメがうさぎをみて、追いこそう、抜かそう、がんばってやる!!と思えるから、人は日々成長できるのだろなあと思った。

子どものみならず人間そのものの認識へも発展させている。まさに、結果も大切だが過程があつてである。人、さまざま違っているからこそ面白い。

⑧ 私は、かめのことうさぎのことしかあまり見ていませんでした。この二匹を見守る動物たちのような存在がいることも忘れてはならないなと思いました。今、気付きましたが、このお話を観聴きしている時は、自分も見守る動物たちの中の一人なのだと思います。私ははじめから、ずっとかめを応援していました。努力している人はすごいと思うし、見ていると、自分も努力しなければと思わせてくれます。でも、うさぎが負けてしまうと、今度はうさぎにも気持ちが動きました。生まれつき才能を持っている人はうらやましいなと思うし、それを十分発揮している人を見ると、やはり、すごいと思います。しかし、このうさぎのように、力を持っていながら発揮できていない人を見ると残念だし、もったいないと思います。このように、うさぎタイプや、かめタイプは、見守る動物たちのような存在の心を動かします。保育者として、うさぎタイプ、かめタイプ、そして、心が動かされる動物たちのようなタイプなど、様々なタイプの個どもがいることを理解してい

なければいけないと思いました。

まさに子どもは個ども。保育者は一人ひとり違う子どもの個人差・個性を形成してゆく過程にかかわる存在である。違うは新鮮でもある。この学生は、紙芝居『うさぎとかめ』を観聴きしての感想を、次のように記している。「観聴き」私の造語であるが、絵本や紙芝居と出会う際は、しっかりと観じつくりと聴き取ることを、学生にはお願いしている。さて、その感想とは、

② 今思えば、誰もうさぎを起こしてあげなかったなあと思いました。私はがんばっているかめを応援していたし、応援したくなります。でも、いばつていてかめの悪口を言つて、そして寝てしまつて負けてしまつたうさぎが何だかわいそうだと思いました。力があるのにそれを発揮できなくて、もったいないと思います。

この指摘、「兎と亀」を素材とすると、毎回出現してくる問題であるが、どう思うだろうか。さて、この紙芝居から、次のような感想ももらった。

◎ 「うさぎとかめ」「かめとうさぎ」には、「かめ」「うさぎ」の他にも「見守る応援する者たち」がいる。たしかに、①かめに対してだれも目をむけず、みんながうさぎだけを見ていたら、かめは途中で歩くことをあきらめたのかもしれない。②うさぎがねていることをみて、自分もねていたのかもしれない。逆に③うさぎ

うさぎとかめ



をみずに、かめばかりみんなが応援していたら、うさぎは一目散に頂上へかけのぼり、かめやまわりのみんなを見返してやったのかもしれないと思った。かめが一生懸命あるいている姿が印象的でした。うさぎは、自分が速いということにうぬぼれていたのでしょうか。でも、大すきなものを目の前にしてたべたくなる気持ちもわかるし、おなかいっぱいねむくなる気持ちもわかります。もし、④かめの好物がでてきて、それをたべ、おなかいっぱい2匹ともねて、レースにならないというのも、おもしろそうだと思います。

学生も様々、色々な思いが、だからこそ授業は面白い。そして学生こそが面白くしてくれ盛りあげてくれるのである。さて、最後にもう一人、こんな感想でもある。

⑩ 私はこの話は童話だと思っていたので、実際は「才能があつてもなまけている人より、努力した人の方が勝つ」という事を教訓とする寓話だと知つて、少し驚いた。この教訓は9割位は正しいので、子ども達にもしっかりと教えてあげるべきだと思う。しかし残りの1割には、やはり才能が関わってくる場合も多い。それは幼児にはまだ教えなくてもよい所だと思う。先生は「うさぎ」と「かめ」を見守る「動物達」の存在にも目を向けていた。たしかに努力する「カメ」に対する声援や励ましは、実際の社会でもある、現実的な事だと思う。「ウサギ」と「カメ」がどちらとも子どもの持つっている部分だという意見は、私も共感した。「ウサギ」の様になまけてはいけない、「カメ」の様に頑張らなくてはいけないうましの意味もあるのだろう。いろんな視点から見る事のできる、興味深い話だと思う。

「兎と亀」、この学生の結びにある色々な視点から観ることのできる興味深い話である。だからこそ、学生からの色々な思い感じ方が出現してきたといえる。授業とは、これではなくてはいけないという答を見出す場ではないと思う。参加している学生の思い考えを私が受けとめ、時にも読みあげること全体へと再提示し、個々の自分なりの答を、とりあえずみつけてほしいと思っている。⑤の学生文中にもある、兎が寝むつていたことにどう対処すべきであったかは、「兎と亀」を扱うたびにでてるテーマの一つである。こうでなくてはいけないという答をうちだすことも一つの方法かもしれない。しかし、このようにも考えられるのではないかという視点を複数提示し、そこから現在の自分なりの考えをまとめておくことを、どの授業でもこころがけているしだいである。先ずは、自分の思いこそが一つの答であるのだから、である。

二種の『うさぎとかめ』どちらを読みたいか

クラス	絵						
		ポールガルドン (横長)			ブライアンワイルドスミス (縦長)		
計		100	9	23	18	19	15
		人	人	人	人	人	人
A		15					
B		16					
C		19					
D		18					
E		23					
F		9					
		人					
		100					
		人					

4 子どもへ、どう「兎と亀」に出会ってもらえるのか

- 子どもへ、どのような時どんな場面で「兎と亀」という素材を出会せたいかと、学生に問うと、次のような声があがった。
- 子ども達が遊びの中で何らかの競争をしている時
- マラソン大会・運動会など友達と競争する前に
- 運動会の練習でみんなの取り組みが今一だった時
- 「走る」ということだけでなく、他にコンプレックスがあつて自信がなくなっている子がいる時
- 同じ活動をしていたりする時に怠けている子がいたり、他の子の頑張りを認めてあげない子がいたりした時
- みんなで製作の時早く作りおえた子が遅れた子をちやかした時
- 自分が悔しい時
- 兎の悔しい失敗してしまった気持ちも知り成長してほしい時
- 心の中でもいいやと諦めそうな時
- 子どもの顔がおちこんでいる時
- 不安でいっぱいの子、自分に自信がない時
- 勝っても負けても頑張ることが一番大切だということを伝え、子ども達へ自信をもたせたい時
- 兎と亀の能力には最初から差があつたけど「勝負には絶対はない」を伝えたい時
- 兎と亀どちらにもいい所があるのを知る時
- 人にはそれぞれ良い所があつて努力によって短所さえも長所になることを伝えたい時
- それぞれの個性に気づき、そして素晴らしさを認めることが出来るように、個性のもっている長所・短所について考え、短所につ

いて伝えたい時

○お互いの個性を尊重しあえる子どもになつてもらいたい時

○人の思いやる心を育てる際

○挫折そうになった時

○努力することの大切さを伝えたい時

○これから努力すべき目標を自分でももたせたい時

○何かしらの問題が起こった時

語りを、どう子どもへたすき渡してゆくかを考えると、以上のような「兎と亀」と子どもとの出会いも考えてみる必要がある。

5 学生の創った「兎と亀」後日譚

パロディという手法がある。パロディとは「有名な作品の文体・韻律・曲をこつけいにまねたもの。諷刺と文明批評の要素を多く持つ」作品である。「兎と亀」にも、星新一「ウサギとカメ」（『未来いそつぷ』新潮文庫）がある。パロディの面白味は、原作にも味があつて、かつ読む人がもとの話を知っていることも必要条件であろう。星「ウサギとカメ」は、ぴりつとした諷刺や文明批評も含んだ作品として仕上がっている。さて、学生にも、「兎と亀」の物語のその後をイメージしてもらい、作品化してもらった。いくつかあげてみよう。

㊦ 宅急便屋さんウサギ

カメに負けたことで動物たちからの人気が下がったウサギは、今まで自信過剰に生きてきたことに気づき反省しました。それからというもの、うさぎはその足を動物たちのために使いたくて、宅急便屋さんを始めました。動物たちはウサギを認め、みんな仲

良く暮らしました。

㊦ 足をいかす

うさぎは、カメに負けて努力する事の大切さを知りました。どんな事に対しても、中途半端に取りくむのではなく、いっしょうけんめい取りくむ事が大切とわかつたうさぎは、足が遅いカメをバカにする事はなく、足が早いのをいかして、悪い子をつかまえたり、おもしろい事をよびにいつたりと、みんなのために走って、仲よくくらしたとさ。

㊦ 森の長になる

かめに負けてしまつたうさぎは、恥ずかしくてたまりません。夢中で走って走って走って……山をとび出してしまいました。日が落ち薄暗くなつた森を、とぼとぼと一人で歩きます。生まれ育つた山から離れ、たどり着いた新しい森（山）で、負けたうさぎは様々な出会いをします。その中で大きく成長したうさぎは森の長になり、昔の自分の話や学んだ様々な事を子どもたちに語りつぎました。

㊦ 『うさぎに勝つ』トレーニング

「遅かつたねえーうさぎくん」とかめがいました。うさぎはとてよくやしそうです。「違うつ違うんだ、これはちよつと……その……」と言いワケをしましたが、もう決着はついていきます。かめは「ほらねっ！僕の方が速かつただろっ！」と自慢気に話します。次の日、仲間達の間では、その話で大騒ぎ。「すごいねかめくん！あのうさぎくんに勝つたんだってえ？」かめくんは皆にほめられ、「まあーねえー」と鼻高々です。その頃、うさぎくんはというと……。くやしいのと、自分のおろかさに気付いてガツクリと肩をおとしています。周りでは「うさぎくん・かめくんに

負けたりしいよ」とヒソヒソ。その日の夜、うさぎくんは、かめくんの家の前を通りかかりました。すると、明かりの向こうには、いつしうけんめいトレーニングをするかめくんの姿。部屋の壁には『うさぎくんに勝つ』とまで書いた紙が。そう！かめくんは、ずっと、ずっとうさぎくんに勝つことを夢みて、体をきたえていたのです。「次はうさぎくんとジャンプの競争だ！」と言っています。うさぎくんはなんだかおかしくなって笑いだしました。そして、「よし、僕も今日からトレーニングだ」と家へ走って行きました。ウサギ君は、かめくんにとってずっとあこがれの存在だったのです。それから2人は毎日のように、あれこれと競争しているそうです♡♡

① うさぎに勝ったかめ

かめの勝利を知った動物たちは、かめをたたえた。立場を失ったうさぎは、どこか遠く町へ引っこしてしまった。そんな中、再びかめに対抗するレースが開催されることになった。かめと競争したい者、かめに代わって1位をとってやろうという者を募集した。しかし、1カ月たっても2カ月たっても応募者はあらわれなかった。すべての動物たちが、その足の速さを認めるあのうさぎでさえ勝てなかったかめに、自分が勝てるわけがないとどの動物も思ったからである。そういうわけで、かめはその後もずっと、うさぎに勝ったかめとしてたたえられ続けたとさ。

① みんなのヒーロー

うさぎに勝ったカメは、その後、みんなのヒーローになりました。そして、カメは、陸上の選手になり、数々の大会でメダルをとりました。オリンピックでも金メダルをとりました。カメは、大金持ちになりましたが、決して、威張ったりせず、前と変わら

ず暮らしていました。そして、たくさんのお金は、病気でずっと寝たきりになっていてカメのお母さんを治すために全部使いました。そして、病気は治り、いつまでも幸せに暮らしたとさつ。

㊦ マラソンピック

うさぎとかめは、その後に、2人でまたこんど対決しようといいました。こんどは村の人達みんなでマラソンしたいねっ!!このきょうそうを通して、いろんな事をおしえられたし。走れない人も応援できるしねっ!!町の人達もお喜び!!「それはいい!!」みんな賛成をしました。競争じゃなくて、努力することが大切だよねっ!!みんなが楽しく走ることがこのマラソンの目的だし。一人一人の自信につながればいいよね!!早く早くマラソン大会やってこないかなあ☆楽しみだあ!!このマラソン大会の名前は『マラソンピック』ね!!

うさぎさん、かめさんありがとう。

① うさぎ派とかめ派

うさぎは負けたのがくやしくて、「もう一度勝負しよう!」といい勝負することになりました。その結果、今度はうさぎが勝ちました。そのせいで、うさぎとかめの仲がとても悪くなり、うさぎ派とかめ派ができ、対立が毎日たえなくなっていました。みるにみかねた村長のヤギじいちゃんが「みんなでマラソンをしよう!」と急に言いだして、マラソンをすることになりました。最初はけんかし合ってた2つのグループも走り終わった後は、なぜか気持ちスッキリしていて、いつのまにかみんな仲良くなっていました。

㊦ お金持ちに

勝ったカメは、あきらめずに進むと成功するとわかり、昔より

努力家になりました。そして、畑の面積も増え大金もちになりました。負けたうさぎは、さぼると自分の力が発揮出来ないことを知り、努力をしようと思い始めました。そして、沢山の木を植え、それを切り売るようになり、大金持ちになりました。努力すれば、何もかも変えられるのですよ。おしまい。

㊦ 妻うさ江とカメ美

うさぎは勝負に負けて苦しい悲しいやら恥ずかしいやらで寝込んでしまいました。そのうさぎを見かねた妻うさ江は夜遅くカメに果たし状を書きました。「夫婦対抗2匹3脚の対決を頼む！」という内容でした。翌朝、ポストを開けたカメ美は手紙を開いてびっくりしましたが、夫のカメ夫にそのことを告げ、決戦の日まで毎朝2匹3脚の練習をはじめました。最初は思うようにいかなかったのですが、決戦の前日に息はピッタリあいました。カメ夫婦はお互いのことをきづかい、とてもやさしい夫婦でした。一方ウサギ夫婦は足の速いことを棚に上げ、前回の失敗のようなことをしなければ大丈夫ノとたかをくくり、1回も練習をしないありさまです。決戦当日……よいいどん！カメ夫婦はゆつくりではあります。確実に息をそろえて進んでいきます。うさぎ夫婦はというと、最初からズテン、ドーンと転んでばかりで全く進みません。そうこうしているうちにカメ夫婦はゴールにたどりつきました。うさぎ夫婦はわんわん泣いて、その競争の日からめったに外へ出てこなくなりましたとさ。

㊧ カメヨちゃんへ告白

うさぎに勝ったかめは「自分もやれば出来る!!」と自信をつけて想いを寄せていたとなりの町のカメヨちゃんに告白する決心をしました。しかしとなり町にいくまで何日もかかるので、うさぎ

と仲良くなつてうさぎにおぶられ、いざカメヨちゃんの元へ!! 「自分の足で来てほしかった……うさぎに勝って調子にのつてらっしゃるの?! そんなことじゃダメです。もつと心をきたえて!!」……肩を落としたカメはうさぎと心をきたえるべく、さらに友情を深めていきました。

以上、学生の創った「兎と亀」の後日譚を保育科一年全学年に書いてもらった作品から11点選んでみた。すると、さて主人公はどこにおいて作品化されているかを分析してみると、

うさぎが主	3 話	3 話	4 話	1 話
うさぎが主	かめが主	どちら共	その他	

であった。ということは、この11人の学生から見ると、かなりバランスよく物語が創られていることがわかる。

また。本考では16人の授業記録からの思いをおりこませてもらった。さて、その一文を兎と亀に対する表字から分析してみると

かめ	10	11	17	3
カメ (カメ夫も含む カメヨ・カメ美)	うさぎ (うさ江も含む)	ウサギ		

亀に関しては、カタ仮名ひら仮名ほぼ同数であったが、兎はひら仮名表字の方が多かった。私は授業記録・レポート等を学生が書き「自分の思い・感じ・考えが、読み手へと伝わる表字を表現し

てみよう」と提示しつづけてきた。その結果としての表字としてみると、「兎と亀」の話は、「うさぎとかめ」または「うさぎとカメ」とする傾向もつかめた。

(参考 新潟県見附市の語り手は、「亀に負けた兎」として、「兎と亀」の後日譚を語り伝えていた。また、この原話をもとに『まけうさぎ』という絵本も作品化されている。「兎と亀」を子どもへと届ける素材とする際、これらのことも、一つのひきだしとしてもっているべきであろう。「亀に負けた兎」は、

『兎が亀に駆け比べをして負けて帰ってきた。兎村では相談して、「お前みてような者を村ねおくことはならんすけね、出ていってくれ」といって追い出してやった。ところがちょうどその頃、山の狼様どこから兎村へ使いが来て、「子兎を三匹献上しれ」といってきたので、さあ兎村はこったい(大変な)騒ぎである。「俺の子ども人の子もかわいげらな、なかなかやれるもんでない」といって、毎日相談ばかりしていた。それを聞くえつけて、負けた兎、こういう幸いだとのこの村へもどってきた。そうして、「俺は兎村をはぎられ(勘当)ているども、もしか俺が子兎を献上せんたつていいようね取り計らったら、この村へ寄せてくれるか」というと、「お前は本気ねそうしてくりられるがんだば、仲間に入れてやらいし」というた。それで亀に負けた兎はいっさんめいて(勇んで)狼様のところへ行った。「狼様、狼様、お前達はこのたび子兎三匹を献上せとのことです、お前達の顔があんまり怖いのでだれも来るものがない。つきましてはあんまりお笑止だども、崖の上であっちの方を向いてちよつとすわつておくんなさいの。そうせば今すぐに連れてまいりますすけね」というと、狼様は「そんなことは造作もな

いこんだ」といって、早速、崖の端であっちの方を向いてすわった。兎はここぞとばかり精ぎりいっぱいの力で、狼様の背中をふん蹴ったので、さすがの狼様もでんぐり返って谷底へ落ちてしまった。うまくいったので、兎はいばいば(得意然と)して、村へもどってきたこの話をした。そうして、子兎三匹はもう献上せんでもよいことになったので、亀に負けた兎は、仲間へ帰ることができたということである』

「亀に負けた兎」は、昭和6年に岩倉市郎が新潟県南蒲原郡で採集し、昭和7年『加無波良夜譚(三元社・刊)』へと納めた昔話である。授業では、学生に「兎と亀」後日譚を書いてもらった後、私が語りの形で紹介した。また、紙芝居『おつきさまとうさぎ』。絵本『うさぎのみみはなぜながい』(ぶんとえ北川民次1962年福音館書店発行)・月刊保育絵本『うさぎのふしぎだいはっけん!』(しぜんとなかよし・かがくらんど41991年世界文化社発行)も、「兎と亀」から発展させる素材として学生へも紹介した

6 まとめとして

二千三年後期・保育科一年6クラスの学生達との語らいの素材として、「兎と亀」もまな板にのせてみた。イソップ寓話の一つである「兎と亀」を、どのように自分の引きだしの一つとして仕上げるかあつて、子どもへと届けられることを共に考えていった授業過程を、本考ではまとめてみた。

注① 246名受講 ABCDEFクラス毎の授業

注② 1998年・エイデル研究所発行